

目次

●はじめに 草の根の国際交流を求めて

●第一部 異文化とつきあう

- 一、短パンでは街を歩かないように
- 二、買物物の心得
- 三、おかねのもち方
- 四、おこもさんにつきまとわれたら
- 五、インドとメキシコの靴みがき
- 六、行動の自由が確保できるか
- 七、スラレル人とスラレナイ人
- 八、手を使う食事と不浄の手
- 九、国々でちがう乾杯とお酌
- 一〇、馬鹿にされている日本人

●第二部 現地語を使おう



余談

- 一 二 六 〇 一五 一八 二一 二七 三二 三七 四〇

四三

コーヒーブレイクの話題

パスポートをなくしたら

強盗用の一五ドル

腹をたてるな

ビザの不思議

社長、社長

頭をなでてはいけない

日本人は馬鹿にされていないか



世界にはいろいろな人が住んでいて、いろいろな文化と習慣がある

- 一一 一四 二〇 二四 三一 三五 四一

一、キレイとキタナイ

二、現地語を使おう(一)

三、この野郎と馬鹿野郎

四、チャンとフオム

五、ハンダルのニム

六、現地語を使おう(二)

七、YOKOYAMA Takuo

か Takuo

YOKOYAMA

か

四四

四七

五〇

五三

五五

五八

六一

● 第三部

宗教は怖いもの

一、アフガンのホテルでの恥

二、イスラムのポートレイト禁止

三、ツイン部屋でのスンバヤン

四、喜捨；すばらしいイスラム教義

五、ラマザン(断食月間)の話題

六四

六六

六八

七〇

七二

● 第四部

人間共通感

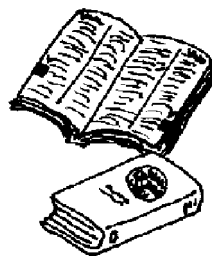
一、日本のコイン

二、安値で買えばよいというものではない

七五

七六

七九



現地語をおぼえよう

安全な水とおいしい水

四六

インドのタクシーを値切る

四九

日本語の中の不合理性

五二

自分の名前

六〇

国語審議会の意見

六二

ポートレイトを撮影する条件

六七

- 三、 スバルカーさん怒る（外国人特別価格）
- 四、 ウィスキーボトルの詰め替え
- 五、 再びキレイとキタナイについて
- 六、 日本人の匂いは
- 七、 パリのピガールでぼられた経験

● 第五部 旅を楽しむ

- 一、 金銭についてのバランス感覚を忘れずに
- 二、 一人旅の危険性、とくに女性の一人旅
- 三、 航空券をなくしたら
- 四、 身体が不調となったときの心得

● くだもの百科

● あとがき



八一	九一	九二	九三	九四	九五	九六	九七	九八	九九	一〇〇	一〇一	一〇二	一〇三	一〇四	一〇五	一〇六	一〇七	一〇八	一〇九	一一〇	一一一	一一二	一一三	一一四	一一五
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

カンボジアの貧しさの程度	七六
自己抑制・自己制御	八〇
空港での会話	八六
最近の感染症のデータ	八九
外地育ちは感染症で 発病しない	九〇
パッケージョン	九二
ピガールの夜	九八
仕事は『春』売り	一〇五
高山病症状	一一三

はじめに

古いダイアリーをみていたら、こんな文章をみつけた。一九七九年のビジネス・ダイアリーである。インドネシアへ行くようになって三年目で、それなりのカルチャー・ショックの最中だった。

『異国の文化とのふれあいを書こうというのが、この文章の主旨である。私の守備範囲は、インドネシアである。私が行ったのは、今年で三回目であり、一年に二〜三ヶ月ずつの滞在なので、インドネシアで暮らした日数は、ゆうに半年を超えるであろう。地質調査という目的上、一般の観光と違って、山地の奥や未開の島々をまわる経験も少なくない。共同研究の相手である、

国立研究所の研究員の人々とは、小さな木賃宿で枕を並べて寝たことも多い。

側聞するところによると、商社の人々でもいつも首都のジャカルタにいて、時々国内を観光旅行するといった生活だそうであり、インドネシアの人と同室で泊まるなどということは、ほとんどない。航空会社のエアーカーゴのオフィスの人と話したのだが、ジャカルタ勤務は三年間ぐらいであり、仕事はすべて英語で済むので、インドネシア語は日常生活のための片言で十分だという。悲しいことだが現地語を習得する気にもならないし、仕事上のつきあいを除けば現地の人々につきあうことは、あまりないという。

私は日本人としてインドネシアの人々と

深くつきあつたほうであろう。いうまでもなく、彼の地の文化とも深くふれあつてゐるはずで「異文化とのふれあい」という主旨の文章を書くことは容易なはずであるが、意外とそうではない。逆説めくが、人々とのつきあいが深くなればなるほど、異質文化とのふれあいという感じがなくなり、「万国の人々はすべて共通である」という感じになつてくるからである。

今年、インドネシア語がある程度自由に話せるようになってきた。思考方法が現地的になつてきたのか、カルチャーショックをほとんど感じなくなつてきている。

もう一つ、どうしてもこの文章をかく上でかいておきたいことがある。「私はインドネシアがそしてインドネシアの人々が好

きだ」ということである。理由がもちろん私にもわからない。しかし、このことは非常に大切なことである。現地で友人や知人の家を訪ねる。子供がたくさんいるが、その子を膝に抱いて話ができるかということなのだ。西洋とちがつて子供は決してきれいではない。二〇年前、我々が子供であつたとき、我々がボロボロで古い着物を着ていたように、子供はうすぎたない。それでも抱き上げることができ。そんなことが重要なことである。

インドネシアの文化を話す上で、押さえておかなければならないことがありすぎる。上に述べた二つのことは、その中でも最も大切なことだと思う。

ともかく、具体的な例をあげてみよう。

はじめて外国へ行つた人は、自分の感性をこえた出来事にあつたり、自己の常識で理解できないような場合に、文化の違いということで片づけたがるものである。

数年以前までは、日本人がジャカルタの国際空港に着くとまずびっくりするのは、カスタム（税関）の役人に「袖の下」をたかられることであつた。現在でも時々、トランクの下から手がでて「二〇ドル、二〇ドル」などといわれる。そして何となく払つてしまう。しばらくして腹が立ってきて、誰かに話したくなり、悪口として仲間内で語り合つと、みんなが被害にあつてゐることがわかる。そして「インドネシア人はいろいろを好む国民だ」という結論になり、やがて新しく日本から来る友人にしたり顔で

教えるようになる。「なあに二〇ドルも袖の下を出せば、なんなく通してくれるよ」などと・・そして、インドネシアを紹介する本にこうした思想が印刷されてしまう。

はたしてこれが事実であろうか。現象的には本当のことであり、彼は裏金を二〇ドル支払つたわけである。しかし、これをインドネシア人のほうから見ると「日本人は何でもわいろで片づくと思つてゐるから、金を請求すれば理由もないのにすぐ払うんだよ。税金をかけるものを持つていなくても、いわれればすぐ払う。彼らは金持ちだから、少しぐらい支払わせても大丈夫だ」ということになる。

彼らは「日本人がわいろを好む国民だ」と思つてゐる。その証拠に欧米人には決

して、二〇ドル、二〇ドルと袖の下を請求したりしない。欧米人は請求されたら、「何故払う必要があるか」をただしてくるし、もしそれが正当ならちゃんと払った上で、領収書を求める。これでは税関の小役人にとってみれば、仕事がふえるだけで、自分の得にはまったくない。彼らは「日本人だから袖の下を請求する」のであり、日本人以外には請求しない。それは、「日本人がわいろを好む」からである。こういつて悪ければ「日本人はわいろを支払うことに罪悪感を持っていない」からである。

日本人は「インドネシア人（アジア人）はすぐわいろをねだる」・・・これがアジアの文化であると思っている。

しかし、それはむしろ日本人の文化で

あって、アジアの人々が日本の文化に合わせるからにすぎない。これは一種の誤解のうえにたつた悲劇かも知れない。一人一人の日本人がもう少し言葉が話せたら、支払わなくてすむのだから・・・私は税関ではインドネシア語を話すことにしている。そうすると彼らは内緒話ができなくなり、何もいえなくなつてわいろを請求してこない。彼らが言っていることがよくわからない上に「二〇ドル」だけがわかるので不安になつてつい支払つてしまう人もいるであろう。これと同じジャンルにはいることがあまりに多い。有名な東南アジアへの“団体セックス旅行”などもそうである。ここで語るには紙面がたらないが、日本の文化の反映だ

ということをよく考えてみたいものだ。

もう一つ例をあげてみよう。三年前にインドネシアで外国人登録をした。そのとき、一〇本の指の指紋と左右の掌紋をとられた。なぜ、こんな手続きをするのかと静かに聞いたら「日本のシステムをそのまま借用しています」とのこと・・・

日本では外国人登録のときにすべて指紋と掌紋の登録を義務づけているのである。うか。もしそうだとすると、それも日本の文化なのか、その根底にある思想は何なのか・・・考えてしまった。

実際にはインドネシアの田舎は美しくかついいところであり、そうしたところにある伝統文化は我々にとってつきない興味のあるものばかりである。しかし、美しいも

のを美しいとかいても、百聞は一見にしかずである。美しいものにはまずふれてみることに。これが第一であろう。ここまでは、文化の違いよりも人間の共通性を述べてきたつもりなのだが、文化の違いに起因する問題も多い』

二〇年前にこんな本を出すつもりになつていたようである。ただ、当時はインドネシアのみであった。その後の二〇年で、二〇ヶ国以上を訪問した。今ではインドネシアを“アジア”と書きかえることができる。アジアが好きになつてしまった。それにしても「三つ子の魂百まで」といったところかとも思う。当時の思いのほうが、新鮮でかつ迫力がある。それをこの本の序文としておく。

横山卓雄